

統一思想、その体系化の歷程（後編）



李相憲

統一思想、あるいは勝共に関して理論を立てることが自分の使命であると悟った。

統一教会の草創期

私は一九五六年に統一教会に入教したが、そのころは統一教会の草創期だった。その時に感じたことはいろいろあったが、その中の一つは、文先生は絶対に個人に対して命令されないということだった。これは非常に印象的なことだった。集会や礼拝の時、命令をしたことがあれば、みんなに向かって、「統一教会の食口たちはこのようにしなければならぬ」とおっしゃるのだった。なぜそうされ

たかといえば、直接命令をするということは、直接主管をすることを意味するためである。我々は未完成であるので、未完成段階の人間は直接主管することができないのである。先生から命令を受けた人が命令どおりに行えばよいが、もし行わない場合には、天の命令に従わなかったという条件が立てられ、一生消されぬというのである。将来悔い改めて良くなったとしても、その人の霊的な履歴書上に、天の命令に従わなかったという汚点が残るというのである。

それゆえ、先生は本人のためにも、直接主管をされない

ということが分かった。直接命令をしたい時はどうなさるかという点、象徴的な表現をされた。一例を挙げてみると、ある大学教授が入教した時、自分を誇る態度を見せたので、先生はある日の夜、ガラスのコップに麦粉をいっぱい入れて、その中に水を注がれた。当然水はすべて外にあふれてしまった。

みんなは、なぜ先生がそのようなことをなさったのか、不思議に思った。器というものは、中に何かが入っていればそこに他のものを入れることはできない。それと同じように、真理を受け入れたい場合は心を空っぽにしなければならぬ。心を空っぽにしないで自分の知識をそのまま持っている、いかに立派な天の真理であるとしても、受け入れることが難しいというのである。先生がそのことを語られる時、そのまま聞けばよいが、聞かなかつたら条件にひっかかるので、象徴的、比喩的にガラスのコップに粉を入れて、そこに水を注ぐ方法を取って、悟る者だけが分かるようになされたのである。また、先生は仮定的、未来的な表現もよく使われた。

例えば、金という人に先生が願いを託される時、「もし金にながしが伝道に行けば、立派に伝道することができ

だろう」というように、仮定的におっしゃった。もし、こうするとどうなるかという表現は、いずれも仮定的な表現であり、命令ではなかった。

その後、私はその金にながしという人に会って、「先生はどうしてそのような表現を使われるか分からない」と言うのと、「それは伝道しなさい」という命令です」と言った。その時私も悟った。そのように象徴的、仮定的、未来的におっしゃることによって、「将来こうなるから、それに対して準備しなさい」ということを伝えられたのである。私がどうしてそのようなことを言うかといえば、先生は統一思想に関しても、そのように未来的な表現で命令されたことを初めは知らなかったからである。

一九五八年、私の入教地である群山に先生が巡回に来られた時、七、八人の食口が集まった中で、「将来、統一主義の時代が来る。統一思想の時代が来る」とおっしゃった。私は特に思想に関心があったので、他の人ももちろんこの言葉を聞いたが、その言葉は一番私の心に深く刻み込まれたのである。

その後、私はそのような時代が必ず来るということを信じていたが、その時私はまだ地方にいたので、ソウルの本

は合わなかったからである。午前中は何も無事に過ぎたので安心していましたが、午後再び集まった時、いきなり私の名前を呼ばれ、「二十一日断食の証をしなさい」とおっしゃった。祈りは効かないこともあるなあ」と思いながら、結局証をするために壇上に上った。

二十一日断食とは、一九五九年十二月一日から二十一日間にわたって行った、私の断食のことであるが、神様の心情を体恤するために、ある食口に勧められて行ったのである。当時、先生は時々、「神様の心情を体恤しなければ天国に入ることができない」と説教の時ごとにおっしゃったので、私のように批判的な人間は断食祈祷、特に決断の祈祷をしなければ神様の心情を体恤することは難しいと、他の人たちは言うのであった。

ゆえに決定的に断食を敢行したのである。そして、二十一日目の夜は、限らない愛を持っておられながらも、人間を救うために苦しみ、悲しむ哀れな神の心情の一部を体恤し、非常に痛哭した。また、人類と万物のすべてがかわいそうだと感じたのである。先生がどうして度々痛哭をなさったかが分かるような気がした。そのような体験が主な内容であった。

夜に再び呼ばれて、今度は「過去に共産主義の運動をし



李相憲先生、黄元鎮先生21日断食後の修練会(中列右から4人目が著者)

部教会におられる幹部たちが、先生の指導を受けながら協力して新しい文化の統一主義時代、統一思想時代を立てるだろうと思っていた。統一思想時代、統一主義時代が私と直接的に関連されたことであるとは全く思わなかった。

また、私は入教して以来約六年間、「このお方は人類を救うために来られた純粹なキリスト教の指導者である」と思っていた。なぜならば、先生は反共という言葉を一言もおっしゃらなかった。先生が反共指導者、勝共指導者であるとは夢にも思わなかった。したがって、私自身も共産主義の運動をしたことがある自分の過去に対して、だれにも言う必要がなかったし、また言わなかった。私は過去の経験は完全に忘れた状態で、ただ信仰生活だけを熱心にしていた。

二十一日間断食祈祷

先生は一九六〇年の御聖誕日祝賀会で、大勢の食口たちに証をするようにおっしゃった。私は心の中で、「私には証をさせないでください」と祈った。なぜならば、他人の証を聞くことは非常に有益で必要なことであるが、自分が証することは自分自身を誇るような気がして、私の性格に

たことに対して証をしなさい」とおっしゃった。それで、私は簡単な証をしたが、私は共産主義の運動をしたことをだれにも言わなかったのに、どうしてお分かりになったのか大きな疑問だった。そして、どうして先生が私にそんな証をさせるのかも疑問であった。なぜかというところ、先生は絶対に摂理に関係ないことはなさらないということを知っていたからである。その時まで、私は先生に関してたくさんのことを研究していたが、研究してみると、先生は気ままに、いい加減におっしゃったり、行動する方ではないということが分かった。その時々に応じた神様のみ旨とかが、食口たちの指導に関係のある言葉だけをいつもおっしゃった。そして摂理的に無意味な言葉や、行動はいつさいなさらないということが私が得た結論であった。だから私に証をさせた以上、何かの摂理的意義と内容があると思った。それはいったい何か」という疑問を持たずにはいられなかった。

証の意味

それから二年過ぎた一九六二年、御聖誕日の夜のことだった。午後十一時になって、先生のみ言が始まった。午

前一時半ごろのことであつたと思うが、三十六家庭を集めておいて、「これから幹部たちは共産主義の理論に勝つことのできる実力を持たねばならない」とおっしゃった。その時になって初めて、先生も反共的、勝共的側面をもっておられることが分かった。私はそのことに対して非常に驚いた。私にとって大きな衝撃だった。私はいつも物事をいろいろな面で深く考える癖があつたが、宗教家として本當に共産主義を憎むべきかどうかという考えを常日ごろからもっていた。

原理的に考えると、歴史の終末には必ずカインとアベルの対立関係が解決されなければならないので、結局共産主義と民主主義が戦わなければならない。先生は神様の愛を地上で実践なさる方なので、共産主義者までも必ず愛するのである。しかし、神様の摂理を地上に広げていくためには、仕方なく共産主義と戦わなければならないことも事実である。ゆえに共産主義者に対する愛の問題と、共産主義理論との闘争の問題は別の問題である。そのように私は定義した。その夜、徹夜してしばらく休んで起きると、劉協会長が私を呼んで、「昨夜先生がおっしゃったことをできる人は李先生しかいません。先生は以前、共産主義の運動

をした経験がありますから、共産主義に対して相当よく知っているはずなので、勝共関係はやはり李先生がやらなければなりません」とおっしゃるのであつた。

その時初めて、先生は以前私に共産主義の運動をしたという証をさせて、私がどのような経歴をもっているかをみんなに知らせておいて、共産主義の批判を間接的に命令されたということを知った。そのように絶対に個人的に命令されずに、先生の話の中で、一人ひとりが自らの責任分担として、感じて悟ることができるように導くのが先生の方法だった。それが当時の先生の方針だった。先生は初めに私に証をさせておいて、劉協会長に私の過去を知らせて、勝共の実力を備えるようにおっしゃったが、その言葉は三十六家庭全員に対して言われたことであり、個人的に言われたことではなかった。

したがって、それを聞いた劉協会長は、責任者としてだが共産主義に対する批判の本を書かなければならないということを知ったが、だれに書かせるかが問題だった。結局先生は、特定の人に書かせるように導かれたと感じた。二年前、先生が私に証をさせたのは、そのような意味があつたことをあとで悟った。

また、一九五八年に先生が、「未来に統一思想の時代が来る」とおっしゃったことも、結局私自身に対する命令であつたということとその時初めて悟った。統一思想の時代が未来に来るということをおっしゃって、それを使命感として感じるように導かれたということをおとて悟った。そしてその時から、自ら統一思想、あるいは勝共に関して理論を立てることが私の使命であると感じた。

執筆と単行本の発行

共産主義理論の批判に関する執筆を始めようとしたが、共産主義に関する書籍はあまりなかった。韓国はその当時、五・一六革命が起こつていて反共が第一の国是であり、共産主義的要素をいっさい容認しなかつたので、共産主義の書籍はなかなか手に入れることができなかった。韓国には大勢の共産党員があつたが、韓国動乱後、共産党は非合法化されて、韓国には共産主義がなくなつた。しかし戦争中、彼らが逃げる時、地に埋めた書籍などがあることが分かつた。それで、だれかが地を掘ってみると、ほんとうに共産主義の書籍があつた。それはレーニンの唯物論と経験批判

論及び哲学辞典であつたが、それを求めて熱心に読んだ。そして、ソウルでいろいろ書店を訪ねたあと、尹元^元氏の『マルクス主義の批判的克服』という本を見つけて読んだが、それは資本論の価値論だけを批判した本だった。しかし、価値論だけでは駄目であり、唯物論と弁証法も必要であつた。それで、これを劉協会長にお願いして、日本にいた韓相吉先生を通して、モリス・コムポースの『唯物論と弁証法』、『唯物史観』、『認識論』などを得ることができた。

それ以外に本がなかつたので、それを読んで勝共理論を執筆しはじめた。その年の十二月に、先生が大田に来られたが、その時に勝共理論を構想中であることをお話しすると、早く書いて本を出すように直接指導してくださつた。そのように先生は個人に対して命令されることがなかつたが、大田に来られた時、既に自身の決意が固まつていることを見られたのか、その時は直接的に指示をしてくださつた。

一九六三年八月一日、本格的な執筆を始めて、一九六四年三月二十日に脱稿した。そして、三月二十四日に原稿を先生に捧げた。文献の引用や、資料の裏付けが足りなかつた。



文先生ご夫妻と共に(1960年代、左端が著者)

始者に会って、様々な問題に対して問答をしたとおっしゃったが、その問答に対して彼らは「本当にそうです」

私は病院を運営していたが、患者は第二の問題だった。患者が大勢来るとは必要であったが、執筆に没頭した時、患者が来ることが面倒になった。それほど、その作業が第一次的なことだった。批判や代案をどのように立てるか全く知らず、暗中摸索する時も度々あった。そのような時天に祈ると、直感的、靈的に思い付くことがあり、メモをした。

また、朝の五時ごろ聖地に行つて、祈禱して問題が解決されたことも時々あった。祈禱しても解決できない時は、ソウルに行つて先生にお目に掛かつて、直接教えていただくこともあった。病院を運営しながらソウルに行くことは、容易なことではなかった。しかも先生はいつも忙しいお方だったので、お話を聞くことは難しいことであつたが、先

生は時間をつくつて詳細に指導してください。そのように、先生は靈的にも実的にも指導して下さつたので、脱稿することができた。

先生の証

一応脱稿したが、もう一つ新しい問題が生じた。私としては、靈的にも実的にも先生の指導を受けたので、それが先生の思想であると思つていたが、第三者がそれを認めてくれるかどうか不安だった。また、たとえ食口が認められても、それで終わることなく、一般社会の知識人たちが認めなければならぬ。そのことを、私は先生の証を通して悟つたのである。ある時、先生は御自身の証をなされたことがある。先生はみ言を地上に宣布する前に、まず全靈界を克服させておいて、神様の前に行かれたという。啓示によつて神様の真理を受けたにもかかわらず、靈界の多くの教祖たちの霊を屈伏させて、彼らから証明をもらうという過程が先生には必要であつたということが分かつた。

先生は四十日間の断食中、霊人体は靈界に行かれ、全靈人たちから認められ、彼らを屈伏させて最後は神様の前まで行かれたということである。また、いろいろな宗教の創

と肯定したということである。宗教の教祖の中で、一番高い所におられる方がイエス様であるが、イエス様ともいろいろな問答をしたあとで、「本当にそうです。あなたの言うことは真理です」と証をしたということである。

そして、最後に神様の前に行かれた。その時もルーシエルだけは絶対に先生の前に屈伏しなかつた。先生がルーシエルと共に神様の前に立った時、神様はたくさんの項目を挙げておいて、「アダムとエバがなぜ墮落したのか、その答えをこの項目の中から選んでみなさい」とおっしゃつた。それで先生が、エバとルーシエルが不倫の関係で墮落したという項目を指摘したら、神様は「そうだ」と答えられたという。そして、サタンは無条件で先生の前に屈伏したということである。私はそのみ言を聞いて、私も先生から学んだ真理を応用する時は、第三者の公認が必要であるということを感じた。したがって、勝共理論も他の人から公認を受けなければならなかつた。

まず、食口や一般社会の人たち、さらに外国の教授たちからも公認してもらわなければ、神様も認められないということとその時悟つた。本を出版する以前、私は原稿をプリントして何人かの講師に送つた。原理的に見て、この原稿に間違つた所があれば、指摘してくれるように頼んで

送ったのである。二人の方から良い意見が返ってきて、私はその意見どおりに原稿に書き加えた。とにかく、認定されたという条件を立てなければならなかったからである。いかに先生が書籍を出版するようにおっしゃっても、それは摂理的な必要性からそのようにおっしゃったのであり、それが将来、本当に世界的に公認されるかどうかは別の問題だった。だから私は非常に深刻だった。

もし、その中に間違いがあったら、天はそれを受け入れるはずがなかったのだ、私は罪を犯す結果になると感じた。それゆえに、参考文献を読む時も心を尽くして理解しようと努力し、一九六八年に勝共理論の本が出版されるようになった。その後、この理論は統一食口たちによって行われた勝共運動や、大勢の反共の教授たちによって、その優秀性が立証された。

『統一思想要綱』の発刊

しかし、この勝共理論は、統一思想の骨格をある程度立てておいて、それに基づいて書かれたものである。それゆえに、勝共理論が出版されたあと、今度は統一思想を整理して、体系化させなければならなかった。その後、一九七

二 年八月、日本で韓日教授親善セミナーがあり、先生の命で参加した。それは、そのセミナーに参加することが目的ではなく、日本に行つて、日本の幹部らに統一思想を伝えるようにとのことだった。それで日本に着いて、当時ちょうど発足した統一思想研究院の四、五人のメンバーに統一思想を講義した。

その当時の講義はまだ簡単なものであったが、存在論、本性論、認識論、価値論、倫理学、教育論、歴史論、芸術論などだった。論理学もだいたいの骨格はできていたが、その時は講義しなかった。したがって、統一思想の骨格はその時ほとんどできていた。学生時代から長い間いろいろ問題を抱いたまま、すべてのことに懐疑的であった私は、まるで心の中が空の器のようだった。その器に先生が下さった内容を全部入れたが、それがいわば統一思想になったのである。

しかし、その思想を体系化する作業は簡単なことではなかった。最初、統一思想を体系化した時、これは李相憲が自分個人の思想を、あたかも文先生の思想であるかのように、つくりあげたのではないかと誤解した人もいたようである。そのような誤解を受けながらも、仕方ないことであると思ひ、私は誤解に対して何らの弁明もしなかった。な

げならば、それが李相憲個人の思想に過ぎなければ、天はこの思想を用いられないだろうし、これがほんとうに先生の思想であるとすれば、必ず天はこの思想を用いられるだろうと思つたからである。だから、別に弁明する必要もな

くただ最善を尽くした。

日本に行つて講義してみると、日本の幹部たちはとても喜んだ。そして、日本で激励され韓国に帰るや否や先生に報告した。「日本で講義してみると非常に喜んでいきます。それで、日本ではこれを日本語に翻訳して出版しようとしていきます」と報告すると、先生は「韓国で先に出版しなさい」とおっしゃった。そして、その時から全力を投入して、統一思想の原稿を書き始めた。一九七三年三月末に執筆を完了して、同年六月一日『統一思想要綱』を発刊するに至った。日本では同年十二月に韓国語版から翻訳して、日本語版の『統一思想要綱』が出版されたのである。

学界の公認

一九七三年から大学教授を対象に、八回にわたつて統一思想ゼミナールを行った。皆非常に感銘を受けて、統一思想でなければ将来世界を救うこともできず、韓国のためだ

けでなく、世界のためにもこれは是非必要な思想であるという感想文が参加者から出たのである。しかし、私はそれで満足しなかった。それは、彼らが韓国の教授なので、そのような感想文を書いたのである。他の国の教授だったら、感想が違ふこともあり得るだろうという思いがしたからである。

一九七四年、日本に行つて全国を巡回しながら、四十日間にわたつて教会の食口たちに統一思想を講義したが、講義を終えて東京に戻つてくると、富士山の中に仙人のような人がいて、その人が是非私と会いたいということだった。その人を訪ねてみると、背が低く、白髪の老人でありながらも顔は紅顔であり、目で霊的な人であるという印象を受けた。

彼は三十年間にわたつて、ほとんどすべての哲学と宗教を研究した大学者だった。そして『新しい共産主義批判』と『統一思想要綱』を見せると、「これはあなたが書いたのですか。非常によくできています。その内容はすべて日本で成就されるでしょう。また、世界でもその内容どおりみ旨が成し遂げられるでしょう。世界は神様の御名によって必ず統一されます」と言った。私が「引用文も参考資料も不十分なので学術書とは言えず、見るに足りない本です」

と言うと、彼は「それは問題ではありません。その内容が立派です」と言って激励してくれた。

それでは一緒に食事をしながら、これが文先生の思想であることを明らかにし、先生が監獄から出発した初期時代の話をあげた。彼は非常に深刻に聞いた。また、私が二十一日間断食をしたことを一緒に行った食口が紹介すると、その老人はその話もしてほしいと言った。できるだけ詳細に断食の話をすると、彼は熱心に聞き入った。そして話し終えると、「もっと他にお話はありますか」と尋ねた。

そのようにして、完全に私たちの教会の雰囲気と同じ雰囲気になり、暗くなるまで話をしたが、その方がちょうど、文先生の思想を証する洗礼ヨハネ的な方であるという思いがした。そして、最後に聖歌を一緒に歌って、この方をみ旨と連結してください」と心でお祈りした。そのようにして、日本のある著名な老学者から統一思想に対して公認を受けたことになったのである。

次は、アメリカに一人でもよいから、公認してくれる人がいればと願っていた時、一九七八年七月に韓国で超教派国際ゼミナールがあった。その時、アメリカから来たマジック博士という神学者がゼミナールの席上で講義する時、「統

一思想は立派であり、神学の統一も思想の統一も、統一思想でなければできない」と言って、熱心に統一思想を褒めてくれた。

そのようにして、統一思想は一応世界的な公認を受けることができた。その後、統一思想と勝共理論に関連した書籍を読んで、多くの引用文献を得ることができた。最後に、先生が公的に認めてくださるかが心配だった。一九七九年十一月四日、韓国の幹部たちが集まった、その席上で、先生は「全世界の統一食口は、皆統一原理、統一思想、勝共理論を学ばなければならない」と公式的におっしゃった。

その後先生は、再び私に対して「韓国と日本の幹部たちに、勝共理論と統一思想の特別講義をして、特別講師を養成しなさい」とおっしゃった。私は先生のこのような指示を受けて、統一思想と勝共理論は天の公認を受けたと解釈した。

最後に明らかにしておくことは、文先生の勝共理論と統一思想それ自体は完璧なものであるが、私が手を着けた思想の体系化は必ずしも完全であるとはいえないことである。したがって、将来立派な学者や後輩たちが現れて、先生の思想を、先生の直接的な指導の下に、より完全に体系化してくれることを心から願うものである。このことは、既に先生にお話ししたことがある。

〈完〉

新しい神観(10)

最終回

摂理の中に働く神

副会長

小山田秀生

第二章 統一神観

(二) 摂理の神

(3) 今後の我々の成すべきこと

その中で重大な問題は、長子権復帰である。我々がなぜ経済を考え、なぜ政治を考えなければならないかという謎がここから解けてくる。皆さんが今からチャレンジしなければならぬ問題が何であるかが見えてくる。そして第二は、具体的な長子権の復帰という問題はどのようにしてや

るのかということである。

①カインとアベル

神の創造理想はどのようになっていくかということ、神の似姿としてのアダムとエバが一体となって子女を生み殖やせば、そこから万物一切が復帰されるはずであった。ところが墮落してしまったので、子供が二つに分かれた。それがアベルとカインである。アベルはアダムの身代わり、カインは天使の身代わりであるが、墮落したので天使にも二通りいる。カイン的な天使と、アベル的な天使である。ヘレニズムというのはカイン的な天使の流れをくんだもの、